

# アーサー・マーフィーの 『中国の孤児』再考

——「フランス戯曲の密輸者」と評される劇作家の  
ヴォルテールとフランスへの認識をめぐって——

加 藤 弘 嗣

**Synopsis:** Arthur Murphy's *The Orphan of China* successfully premiered with its patriotic theme hailed with acclamation from London audience in the midst of Seven Years' War. With this tragedy he was supposed to wage cultural war against Voltaire, a great man of letters representative of hostile country. So Murphy's *The Orphan of China* should have been an antithesis to Voltaire's *L'Orphelin de las Chine*, which he allegedly rewrote substantially so as to show off his literary superiority. His drama, however, was deemed to be as a mere adaptation of French literary giant's. Such an evaluation of his work was an inevitable consequence, given the French influences prevalent in British dramatic circles, which Murphy, a proficient adapter of French plays at that time, supposedly could not have contracted.

## 序 論

1753年7月28日付の『グレイズ・イン・ジャーナル』(*The Gray's-Inn Journal*)では、ヴォルテール(Voltaire)宛ての書簡という形で、常々イギリスの演劇界を辛辣に批判してきたヴォルテールが自作の劇作の序文においてイギリスの劇作家の頂点であるシェークスピア(Shakespeare)の『ハムレット』(*Hamlet*, 1603)を取り上げ、この悲劇をオフィーリア(Ophelia)の埋葬の場面などに象徴される「フランスやイタリアの一般大衆でさえ許容しない下卑た不合理さの満載した野蛮な一篇」として酷評したことなどへの反論が展開される(*Gray's-Inn Journal* 350-51)。この書簡においてホメロス(Homer)やミルトン(Milton)と併肩する不世出の「偉大な詩人」であり英国民にとって詩作上の「ある種の確たる信奉の対象」であるシ

ェクスピアを擁護し、「我が国の詩人の想像力の並はずれた力」や彼の創作の「指針」であるその「直観 (the light of NATURE)」などについて持論を展開したのはアーサー・マーフィー (Arthur Murphy) であった (*Gray's-Inn Journal* 354, 356)。そして再びマーフィーは、彼の悲劇『中国の孤児』 (*The Orphan of China*, 1759) の巻末に所収された「ヴォルテール氏宛て」 (“To M. De Voltaire”) と題する手紙において、「最も優れた天才」であるシェークスピアの欠点を痛罵することに愉悅を覚えるヴォルテールを相手に論戦を挑むことになる (Murphy, *Orphan* 94)。今度の論点はタタール族 (Tartar) の中国侵攻というヴォルテールと同一の題材を扱った自作をめぐるものであったが、「ヴォルテール氏宛て」の冒頭でマーフィーは、この書簡は「敵との手紙のやり取り」のような趣を有するとの挑発的な発言をする (Murphy, *Orphan* 88)。その理由について七年戦争の最中で英仏両国が交戦中という事情によるのみでないとするマーフィーは、ヴォルテールの最近の文筆から彼が文化的に英国を野蛮な後進国として侮蔑していることが明白でイギリス国民への敵意を隠さないからだと主張する (Murphy, *Orphan* 88)。こうしたマーフィーの発言の意図には、七年戦争の勃発以来ヴォルテールが、自身を文化的な戦いを遂行するフランスの愛国者と考えており、また彼が文壇での戦いにおけるフランス軍の総司令官と見做されていたという背景がある (Bruyn 156, 152)。本稿では、マーフィーが自作の悲劇において、フランスでの公演で大喝采を呼び英国でもその翻訳が人気を博したとされる、ヴォルテールの『中国の孤児』 (*L' Orphelin de la Chine*, 1755) という先行するテキストにどのように戦いを仕掛け、その結果生まれた彼の『中国の孤児』が、ヴォルテールに対する、また対仏戦争の真っ只中においてフランスとの「文化戦争」と評価されるに相応しい作品であるのか、「フランスのクジャクの羽で着飾った英国のカラス」とまで彼が揶揄されるに至った、当時の演劇界や英国社会全般におけるフランスとの関係性を視野に入れながら読み解いてみたい (Chang 54; Dunbar 302)。

## 第1節：『中国の孤児』で展開されるヴォルテール批判

ヴォルテールの『中国の孤児』は、中国元の時代に上演された主君への忠心と自己犠牲をテーマとした復讐劇『趙家の孤児』(*The Orphan of Chao*)を題材としている(Liu 201)。紀元前の中国、春秋戦国時代の晋を舞台とするこの歴史劇は、プレマール神父(Prémare)によりフランス語に翻訳されヨーロッパに紹介されるが、ヴォルテールは、この芝居の歴史的背景をチングスハーン(Genghis Khan)率いるタタール族による中国侵攻の時代へと舞台転換する(Kitson 216)。またプレマール訳の歴史劇は、一族を根絶やしにされた孤児が成長しその仇を討つ25年間を扱い、三一致の法則と矛盾するため、ヴォルテールの『中国の孤児』では前王朝の唯一の末裔は乳児のままである(Appleton 85)。極論すれば、主君の遺児を守るための自己犠牲というテーマの他、ヴォルテールが芝居のリシュリュー公(Richelieu)への献辞で触れているように、『趙家の孤児』との共通点は名ばかりということになる(xii)。

一方、「その筋書き」や「趣旨」に関しこのヴォルテールの芝居からの影響が顕著であると当時評されたマーフィーの『中国の孤児』について言えば、時代の設定はヴォルテールを踏襲するものの、タタール族侵攻の20年後を扱っており、王家の継承者を乳飲み子ではなく一人前の若者として登場させている(*Critical Review* 440)。また先王の遺児と犠牲となる上級官吏の子を乳児に設定したヴォルテールに「中国に如何なる変化も変革ももたらすことのできない赤子」に観衆は興味を抱くだらうかと異議を唱えるマーフィーは、上級官吏ザンティー(Zamti)の子エタン(Etan)として育てられ後に王家の後嗣と判明したザフィムリ(Zaphimri)に、「冷酷な王殺し」で「ならず者の略奪者」であるティムルーカン(Timukan)を果し合いで倒させ、一族の敵討ちをさせることになる(Murphy, *Orphan* 92, 82)。

マーフィーが、序論で触れた「ヴォルテール氏宛て」において劇中の山場の欠如などヴォルテールの芝居の欠点を簡潔に指摘する中、王の遺児の年齢

設定と並び特に異論を唱えているのが、彼が「悲劇の長い場面を気まぐれな恋で満たす」という「当世の作家たちの陳腐で無能な戦略」とまで酷評する、征服者ジェンギス (Gengis) の上級官吏ザンティーの妻アイダメ (Idame) に対する「隠された情念」というテーマである (Murphy, *Orphan* 91)。中国で亡命者として屈辱の中青春の日々を過ごしたジェンギスは、若きアイダメに恋心を抱き、彼女のことを「専制的な魅力」で「心を支配する絶対君主」として崇めた (Voltaire 35)。その後征服者となって中国に帰還したジェンギスは、アイダメと再会するが、彼の心の中に恋という「無様な優しさ」が再び芽生え、「愛しいアイダメ」は征服者の心を「君主の意志」よりも「絶対的で確実な力」で征服し統治するなどと嘆息することになる (Voltaire 34, 47)。腹心オクター (Octar) によって、これまでの戦いは、ジェンギスが「愛の浅ましい奴隷」となり「全ての勝利が愛により拭い去られる」のを「勇敢な仲間たち」と目撃するためではなく、彼の「栄光」のためであったのにと苦言を呈される中、ジェンギスは、愛か栄光かあるいは愛か名誉かと当時の悲劇にお決まりの葛藤を繰り返しながら、結局、「征服者を跪かせ、主君を奴隷にする」よう運命づけられたアイダメに対し王家の末裔と彼女の家族の命と引き換えに、彼の王妃となるよう求める (Voltaire 52, 54)。しかし「神の現身」でもある両親への忠孝と神聖な「結婚の契」と「尊い夫」への愛を理由に拒絶されたジェンギスは、彼の迫害から逃れるため心中を図るアイダメとザンティーの姿に心を打たれ、最後には「転向者 (convert)」となって、彼らの「理知、正義、また道徳」について教えを乞い、「勝者たち」が「被征服者ら」に統治をさせる、つまり「英知」に「勇気」や「蛮勇」を治めさせ、そして「戦いにおいては無敵」の君主が彼らの法を遵守することを宣言する (Voltaire 55-56, 72)。

ジェンギスの「野蛮と暴政からの転向」とその誘因となったザンティーの妻アイダメの「愛の教化力 (civilizing power of love)」を戯曲化した「異国風ロマンス」と評される、ヴォルテールの『中国の孤児』に対し、マーフィーは、謀反を企てるような影響力を一切持たず、また王族とは何の血縁も無く、「異民族間結婚 (intermarriage)」によっても彼の王権の正統性を強

化することができない「上級官僚の妻」を恋い慕う「無骨な征服者」の描写に異論を唱え、その姿をパリのチュイルリー宮で嘆息する恋煩いの遍歴の騎士に擬える (McGirr 2; Murphy, *Orphan* 90-91)。そしてマーフィーはこうした反論を自作の『中国の孤児』の中に寓意的に織り込もうとしたのであろうか、実子ハメット (Hamet) を王の遺児ザフィムリの身代りとして朝鮮に避難させ、ザフィムリを我が子エタンとして育てた「20年間の心労と犠牲」をザンティーの妻マンデーン (Mandane) の「やつれた姿」や「色褪せた目」に反映させ、「普遍的な美」、あるいは「肉欲、羨望、そして情欲の対象」として描かれたヴォルテールのアイダメとの差異を浮き彫りにする (McGirr 6)。さらに言えば、「みだれた髪」の「狂気じみた途方もない悲嘆」の女と侮蔑されるマンデーンが、実子の命と引き換えにティムルーカンに「婚姻の誓い」を破り「スキタイ族の妻」となるよう脅迫される一場面があり、王家の遺児の身代りに息子を犠牲とすることを迫られ、悲しみに打ちひしがれたアイダメが「悲嘆の中でさらに美しさの増す」のとは対照的な形で、ジェンギスのアイダメへの求愛的一幕が風刺されもする (Murphy 45, 51; Voltaire 38)。

マーフィーは、マンデーンをアイダメとは対照的な姿で描写し、ヴォルテールの女主人公の「性的な魅力」が内包する愛の「教化力」を、圧政者ティムルーカンらの言動で諧謔的に物語るのだ (McGirr 8)。加えてマーフィーの『中国の孤児』では、ヴォルテールの「異国風ロマンス」がこのような形で風刺されるだけでなく、アイダメの「愛の教化力」に象徴される「文明と野蛮の相克」における「中国文明の野蛮な侵略者への健全な影響力」が反転され、物語の結末をめぐって両者の差異が前景化されることにもなる (McGirr 2; Ou 398; Dunbar 66)。

## 第2節：征服された征服者という言説への風刺

君主の遺子のために自己犠牲を厭わないザンティーやアイダメの姿に直面しジェンギスは、二人の「これらの気高き考え」や「この高邁な精神の生来

の崇高さ」の源はどこにあるのかと感嘆し、彼の二人の「高潔さ」に対する憧憬はやがて、歴代の君主が「征服や武力」に頼らず「英知」によって統治する国の「勤勉で高貴な民」へと向けられることになる (Voltaire 51)。そして彼らの「美德」を妬ましく思うジェンギスは、「征服者」が「被征服者」に凌駕されるのを恥じ入るものの、結局、ザンティーやアイダメに共感し、物語の結末において「中国の価値観」への転向者となり、「文明の有する影響力への賛美」の物語は幕を閉じる (Voltaire 52; Ballaster 213-14)。こうした侵略者タタール族が同化され文明化されるという「征服された征服者」という逆説は、13世紀の蒙古族による侵攻と1644年の満州族の北京制圧という二つの歴史的な出来事に基づいており、作者ヴォルテールもまた『中国の孤児』の献辞の中で、「無知で野蛮な勢力に対する理性と天賦の才の優越性」を描く彼の物語が、「勝者のタタール族」が「征服した国の風習」を変えず「あらゆる芸術」を保護し「全ての法」を採用し、「二つの民族」が「世界最古の法」の下で「たった一つの国家」を形成したという2度の歴史的事例に依拠するものだと述べている (Yang 33; Voltaire VIII-IX)。

それではこの「征服された征服者」という中国の歴史上の「逆説」が、マーフィーの『中国の孤児』ではどのように描かれているのだろうか (Yang 33)。征服者ティムルーカンは、「異国の文明の有する英知と古代からの風習に魅了されること」もないまま、「悔い改めることのない暴君」として王家の末裔ザフィムリの刃に倒れる (Appleton 85)。またその一方で、王の忠臣ザンティーとその妻マンデーンは非業の死を遂げ、悲劇的結末を迎える。ともあれマーフィー版では、「征服者」は、「高潔さ」や「英知」や「美德」ではなく、「武力」により駆逐されることになる (Voltaire 51-52)。さらに言えば、マーフィー版ではこの中国の歴史上の逆説が劇中の人物の言葉によりある種の方策として嘲笑される。ティムルーカンは、「この扱いにくい民族 (stubborn race)」を支配するための「術策 (art)」とは、彼らの「柔和な挙動」や「美德、法、そして習慣」を受け入れ、「全体を融合して一つの区別のない国民 (one undistinguish'd people) を作る」ことであると豪語し、前述の献辞におけるヴォルテールの見解が皮肉られる形となる

(Murphy, *Orphan* 23)。加えて露骨な格好で、ティムルーカンの臣下ながら旧王族の信奉者という設定のマーバン (Mirvan) は、「征服者」が幅を利かせるためには、「慈愛の偽装」という「野心的振る舞い」を隠す「覆い」が必要であり、「悪」でさえ蔓延するためには「美徳のうわべ」を要すると毒づく (Murphy, *Orphan* 79)。そしてこのマーバンの毒舌に上機嫌のティムルーカンは、「民の繁栄という見せかけ」のもとで征服者は国を食いつぶすのだと本音を吐露する (Murphy, *Orphan* 79)。征服者タタール族の文明化という歴史的逆説をめぐる、両者の解釈の相違が浮き彫りとなるところであろうか。

しかし中国の歴史や文化にまつわる両者の認識の差異はこれだけに留まらない。頑なに中国文明の感化を拒むティムルーカンの描写を通じ、ヴォルテールを魅了した中国の一側面を自作において拒絶するマーフィーは、ヴォルテール版でザンティーやアイダメの自己犠牲を通じて肯定的に描かれる、彼らの「気高き考え」や「高邁な精神の生来の崇高さ」の源泉とされる「中国の教義 (China's tenets)」に関しても異を唱えることになる (Chang 74; Voltaire 51-52; Murphy, *Orphan* n. pag.)。

### 第3節：文化的に盗用される中国

ヴォルテールの『中国の孤児』は、「中国文明の優越性」と孔子の「家父長的温情主義 (patriarchal paternalism)」について物語るが、その女主人公に関しては、マーフィーのヒロインであるマンデーンと比較すると、「母親の愛」にまつわる明確な発言が少なく、そして「家父長的な正統性 (patriarchal orthodoxy)」により従順であると評される (Ou 398-99)。一方マーフィーの描いたマンデーンは、「消極的な献身者」のアイダメとは異なり、「行動的な母親」であり「感応的で自発的な女主人公」で、物語に登場する唯一の女性として儒教的な「絶対主義」への拒絶や君主の「神性 (divinity)」への不信においてより確個不伐であると指摘される (McGirr 10; Ou 386)。それは、王の遺児ザフィムリの身代りである実子ハメットがティ

ムルーカンらに拘束監禁されたと聞き、息子の正体を明かし解放を求めるようザンティーに迫る一幕において象徴的に描かれる。

マンデーンは、「全ての歴代の神聖な君主たち」への忠義を理由に彼女の哀願を頑なに拒否する夫ザンティーに対して、「世の中の笏を持った支配者たち」も自分たちと「同じ土くれ (common clay) から出来ており」、「各々の臣民」さらに「最も卑しい奴隷」とも同じように「人間の悲しみの杯」を飲むよう運命づけられているのではないか、また「悲嘆」の下では皆平等ではないかと反論し、「聖なる君主たち」とは言われるものの、「彼らの権利」の根拠は、神ではなく「人の手 (policy)」によるものだと主張する (Murphy, *Orphan* 32-33)。そして自分の訴えは「母親の大義 (cause)」に基づき、また家族という「大義」のためであり、家族という「最も尊い絆」は「王たちの有する正統な神性」をはるかに優ると強調する (Murphy, *Orphan* 33)。マンデーンはこのように自己主張と「個人の権利」について論じる能力を備えた「物言う主体」として描かれ、フェミニズム的な視点で言えば、女性の「控え目な態度 (self-effacement)」を説く「家父長主義の絶対的理念」に反することになるという (Ou 386)。マーフィーが、「有徳の臣民」による「至高の歴代君主たち」への「絶対的忠誠」というテーマを、賞賛よりもむしろ批判の対象に転化し、その結果 14 世紀中国の忠義と復讐のドラマを、「中国の文化と政治」を象徴する「家父長主義」と相反するフェミニズム的な「私的な家庭的美徳と誠実さ」の物語へと変換するに至ったと解釈されるのも、無理からぬことであろう (Ballaster 214, 217)。

マンデーンによる家父長主義への批判と関連し指摘したいのは、芝居の前口上で「君主という大義に熱狂する愛国者」として評される彼女の夫ザンティーが、「王権神授 (right divine in kings)」という考えを有せず、国民の「自慢の権利」が「自由という精髓 (freedom's choice)」に基づく英国において、「忠誠心」が「本性」と「愛情」を凌ぐ彼の言動が常道を逸し違和感を与えるとしても、この「不可解な人物 (dubious character)」の「一寸した錯誤」は、「中国の教義」に由来すると弁明されることである (Murphy, *Orphan* n. pag.)。このような形でマーフィーの『中国の孤児』では、マン

デーモンやザンティーの言動などを介して、中国の象徴する「絶対専制」や「王権神授」が批判される中、国家に対する家族の絆の優越性が説かれ、そして前口上でみられるように「英国の自由に対する擁護」が仄めかされる (Yang 160-61)。またさらに「失われつつある自由」であるとか「我々が大切に積み重ねてきた自由の栄光」など「自由」という言葉を含む台詞が劇中で何度か語られるためか、七年戦争の戦時下、ある詩文の中でマーフィーが「愛国と自由の教師」として賞賛されたともいう (Murphy, *Orphan* 12, 27; Emery 49)。マーフィーの芝居は、当時の人々にしか容易に理解できない愛国的で政治的なメッセージも孕んでいたようであるが、ここで着目したいのは、『中国の孤児』で描かれる中国は、ある種の「文化的盗用 (cultural appropriation)」の対象であり、英国独自の「自由」という価値観を再確認するための作業用「枠組み (template)」となったのではないかという点である (Dunbar 73 n; Yang 169, 161)。言い換えれば「中国という他者」が一種の「下敷き箔 (a foil)」として機能し、英国性、つまり中国の絶対専制とは異なるイギリスの「立憲君主制」が浮き彫りにされ、前口上のような露骨な格好で称揚されたのではないかということである (Thorpe 25)。ともあれ英国の「立憲君主制」への賛美については、前口上のみならず、劇の結末においても、ザンティーが王となったザフィムリに対し今際の際に遺した、「倫理的義務感」や「美德」に基づく臣民のための統治に関する忠言において仄めかされるところでもある (Chang 76)。

このように英国の立憲君主制を前景化するためにマーフィーは中国をある種の「枠組み」として利用する (Yang 161)。一方マーフィーが中国という「下敷き箔」により暗示しようとしたのは、イギリスとフランスの王政の相違ではないのかとの指摘もある (Thorpe 25; Chang 81)。そこで『中国の孤児』におけるヴォルテールとの関係性で触れたいのは、芝居で風刺される中国の「絶対君主」への「愛国的熱狂」をフランスの絶対王政に関連付け、『中国の孤児』をフランスに対する文化的優越を喧伝するための「愛国主義的活動」と解する見解や、序論や第1節で触れた「ヴォルテール氏宛て」の書簡を先行き不透明な対仏戦争における「文化的宣伝」の一環と捉え、ヴ

オルテール版がマーフィーによりフランス批判のために利用されたとの見方があることだ (Ou 386, 384 ; Thorpe 37-38)。こうした解釈に基づくなら、マーフィーの『中国の孤児』は、英国の「立憲君主制」とフランスの「絶対王政」という「近代性」をめぐる両者の相違を「概念化」する媒介項として、中国のみならず、先行するヴォルテール版をある種の「枠組み」や「下敷き箔」のように援用した格好となろう (Thorpe 38-39 ; Yang 161 ; Thorpe 25)。だがしかしマーフィーの『中国の孤児』での挑戦を、このように反仏のための「愛国主義的活動」や「文化的宣伝」の類とのみ位置づけても良いものだろうか (Ou 386, 384 ; Thorpe 38)。

これまでヴォルテール版との関係性に関し相違点のみに焦点を合わせ論じてきたが、ヴォルテール版との類似点についても看過できない側面がある。次節で論じるようにマーフィーの『中国の孤児』の山場におけるヴォルテール版からの反響は明らかで、それは当時の書評でも指摘されるところであるからだ。またヴォルテール版との共鳴は、第5節で考察する英国演劇界におけるフランスの影響を背景とするもので、10歳から16歳までの6年間、フランスの英国イエズス会系列の学校でギリシャ・ローマの芝居に触れ、劇作家としての下地を培ったとされるマーフィーにも、その傾向が色濃くみられるからでもある (Emery 3-4)。

#### 第4節：ヴォルテール版からの反響

前節で論じたようにマーフィーの『中国の孤児』を、中国の「愛国的な絶対専制」ではなく「英国の立憲君主制」に対する賛辞として解釈するならば、ヴォルテール版との差異が歴然となってくる (Ou 386)。しかしながら「中国文明の優越性」や「家父長的温情主義」について無批判的に物語るとされるヴォルテール版においても、マーフィーの女主人公と比べると「家父長的な正統性」により従順で「消極的な献身者」と評されるアイダメとは裏腹な彼女の姿が物語られる (Ou 398-99 ; McGirr 10)。我が子が王の継嗣の身代りとなることを知ったアイダメは、「粗暴なタートル」より「無情で

野蛮」である「この恐ろしい生贄」の真意についてザンティーに問い質す (Voltaire 28-29)。そして一臣下として王家との絆は家族との絆よりも神聖であると主張するザンティーに、「埋葬され、土となった歴代の王たち」という、このような「墓の中の弱々しい神」に対して自分の「子供を犠牲とすることを誓った」のかと君主の神性に対して疑問を投げかけ、「偉大な者と卑しい者、臣民と帝王」と「根拠のない印 (idle marks)」で仮に区別されていたとしても、皆「生来平等」であり、「不幸」に差別はなく、全ての者が其々の「悲しみ」に耐え偲ぶべく運命づけられた存在である旨抗弁する (Voltaire 29)。アイダメの反論は、前述のマンデーンの「人間の悲しみの杯」にまつわる台詞を想起させよう (Murphy, *Orphan* 33)。さらに同じ場面でアイダメは、「自然と婚姻 (Nature and Marriage)」は「第一法則 (the first of laws)」で「人類全てにとっての大義と最も大切な絆」を意味し、これらのみが天与のもので他は全て人の手によるものだとまで断言する (Voltaire 31)。このアイダメの主張も「王たちの有する正統な神性」に優越する「最も尊い絆」に関するマンデーンの台詞と通底する (Murphy, *Orphan* 33)。

マーフィーの『中国の孤児』に関して、「孤児となった後継者」の命を守るため如何なる犠牲も厭わない「中国の臣下」が批判的に描かれ、こうした「有徳の臣民」の「至高の歴代君主たち」への「絶対的忠誠」がヴォルテールの『中国の孤児』とは対比的に批判的視点で物語られると解釈されている (Ballaster 215)。しかしこの見解はヴォルテール版自体にも当てはまるのではないか。今まで論じてきたような「筋書き」上の「逸脱」や「自作の新しい寓話との置き換え」という形で、ヴォルテールの『中国の孤児』との差異は決定的であるものの、同時にマーフィーの物語におけるヴォルテール版からの反響も否定できないのではないか (Murphy, *Orphan* 88)。さらに付言するなら、マーフィーの『中国の孤児』について書評した1759年5月の『クリティカル・レビュー』 (*Critical Review*) は、物語における悲劇的クライマックスへの「漸次的移行」の欠如や「美德」という言葉の多用などを問題視しながら、こうした「欠点」を相殺する一場面として、「臣下の忠義

と母親の愛情」との葛藤を劇化した、ヴォルテール版とも共鳴する一幕を約3ページにわたって引用しており、物語の見せ場でのヴォルテールの影響は明らかといえよう (*Critical Review* 435-36)。そのためであろうか、この『レビュー』の論評は、『中国の孤児』所収の「ヴォルテール氏宛て」について、その書簡におけるマーフィーの見解の正当性を認めながら、しかしこの類の手紙は、マーフィーが自作で積極的にその「趣旨」や「筋立て」を援用した人物に対する非礼を意味するので割愛すべきであったと主張する (*Critical Review* 440)。『レビュー』の評論を一例として取り上げたが、マーフィーの『中国の孤児』は実際ヴォルテール版との関連でどのように評価されていたのだろうか。さらに言えばマーフィー版をめぐる当時の世評は、英国の演劇界におけるフランスの影響力を背景とするものでもあった。

### 第5節：フランス戯曲の密輸者と英国演劇事情

マーフィーの戯曲に好意的な書評紙の一つは、彼の『中国の孤児』がヴォルテールの「写し」ではなく「フランス人の原作」に基づきながらも「その筋書き」において「かなりの改良」を伴う「新しいイギリスの戯曲」であると評価したが、これは数少ない事例で、殆どの批評家たちが「単なる翻案もの」と評することになった (*Dunbar* 72)。これには政治的立場や人間関係が批評の方向性を左右するという時代において、マーフィー批判の決まり文句が「フランスの戯曲の密輸者」となっていたこととも関与している (*Dunbar* 149)。フランスの戯曲の剽窃物としてマーフィーの芝居を揶揄する評論家たちは、「マーフィーはフランス製の浮き袋で泳ぐ」とか彼のことを「フランスのクジャクの羽根で着飾ったイギリスのカラス」などと嘲笑した (*Dunbar* 166, 302)。事実、彼の芝居の着想や筋立てまた登場人物の造形などにおいてコルネイユ (*Corneille*)、モリエール (*Molière*)、デトゥーシュ (*Destouches*) などのフランスの劇作家からの借用がみられ、もちろんヴォルテールもその一人で、彼の喜劇『自分が損するだけ』 (*No One's Enemy but His Own*, 1764) は、ヴォルテールの『うかつ者』 (*L'Indis-*

cret, 1725)の「翻案もの」と考えられている (Dunbar 160)。そのためマーフィーの芝居は当時フランス産の「忌まわしい愚行 (bleeding fopperies)」からの切り貼り」と揶揄嘲笑されがちであったものの、こうした批判は、彼のみならずイギリスの演劇界にも当てはまったかもしれない (Dunbar 302)。

18世紀後半、小説の領域ではイギリスはヨーロッパにおいて先進的立場にありフランスの文壇からも賞賛されていたが、演劇の世界ではかなり事情が異なり、戯曲の分野においてフランスに追随する英国では、多くの新作とされる芝居がフランスの古典の焼き直しであったり、多くのフランスの戯曲がロンドンの観客のために本歌取りされたり潤色されたりし上演されたという (Eagles 47, 41, 48)。またフランスの芝居の翻案でなく明らかにイギリスものとされた戯曲にも、モリエールやデトゥーシュなどの劇作家の作品から転用された登場人物や挿話が散見されたという (Eagles 48)。そんな中、マーフィーの戯曲は、ギャリック (Garrick) やコールマン (Colman) によるフランスものの脚色より顕著に「新古典主義的でフランス風」であったとされ、彼が「フランスの戯曲の密猟者」として揶揄されるのも故無いことではなかったが、しかしこうした盗用はマーフィーだけに限ったことではなかったのである (Eagles 53; Dunbar 149)。それ故英国の演劇界におけるこのような風潮も視野に入れ、マーフィーの『中国の孤児』へのヴォルテール版の影響について論じる必要があるのではないか。序論で触れたように「ヴォルテール氏宛て」の冒頭でマーフィーは、七年戦争の戦時下であることを背景にヴォルテールへのこの書簡を「敵との手紙のやり取り」のようであると表現しているが、実際のところヴォルテールへの対抗心はともかく、マーフィーのフランスに対する認識はどのようなものであったのだろうか (Murphy, *Orphan* 88)。この問題を考察するに当って最終節ではフランスかぶれの若者を主人公とする彼の喜劇『パリよりの英国人』 (*The Englishman from Paris*, 1756) について考察する。またこの芝居で前景化されるマーフィーの対仏感情は、ヴォルテールの『中国の孤児』を受容する際、顕著な相違を孕みつつその影響も明確化されるという形において、先行するテ

キストに対し彼が示した姿勢とも相通ずるものがある。

## 第6節：対仏感情の両義性と劇作家マーフィーの節度

「奢侈 (luxury)」という18世紀の英国において「最も重要な社会や政治上の概念」は、宗教、社会、経済、政治に関する著作の中で度々扱われるテーマであった (Sekora 9)。中でもジョン・ブラウン (John Brown) による「奢侈」批判の書である『当世の流儀と主義に関する見解』 (*Estimate of the Manners and Principles of the Times*, 1757) は1750年代において最も読まれた著作の一つであった (Sekora 93)。ブラウンは、イギリスの「当世の流儀の特徴」は「虚飾で享乐的で利己的な柔弱 (Effeminacy)」にあると指摘し、この時代精神は「国家の安定」にとって致命的であると危惧している (29)。そんな中、こうした「柔弱」をもたらす一因として「無教育な若者」による外遊に着目し、「あらゆる外国の愚劣、柔弱さ、あるいは悪徳」が「無知な若者」の「未熟な気質」という「恰好の土壌」にすぐに「根を下ろし繁茂する」ことになると懸念する (Brown 34)。特にブラウンはフランスについて同様に「虚飾で柔弱」であり、その国に英国当世の流儀は範を取ると指摘するが、マーフィーの『パリよりの英国人』は、そんなフランスに「若者の品行を正す」のは「フランス流の教育」が一番であるとの考えで送り出され、「フランス最良」で「イギリス嫌い」となって帰国した若者をめぐる喜劇ということになる (Brown 135; Murphy, *Englishman* 1; Spence 66)。

『パリよりの英国人』では、「フランス流の教育」で「完全な気取り屋」となった主人公のみならず、受け売りの社交界の作法を主人公の許嫁に指南し「上流社会 (Beau Monde)」はこうした「些事 (Trifle)」の寄せ集めであると嘯くフランスかぶれの英国婦人や、「イギリスという国」への「侮蔑」を助長する執筆物を著わすフランス人の聖職者といったフランスからの随行者たちの言動により、柔弱で偽善的で不実なフランス人の姿が戯画化される (Murphy, *Englishman* 27, 22, 6; Spence 67)。しかしその一方でイギリ

ス人の「乱暴，飲酒癖，食卓作法，けんか騒ぎ，そして狩猟好き」などの否定的な側面も，酒の上での乱痴気騒ぎを得意げに語ったり一日中キツネ狩りに明け暮れたりする主人公の旧友たちや，主人公らを「フランスのスパイ」だとして追い回す「野蛮人の群れ」である暴徒らの存在により風刺される（Spence 66；Murphy, *Englishman* 12, 16）。フランスとの戦争の勃発で愛国心が高まる中にもかかわらず，暴徒に追跡されスリの被害にも遭った主人公が，「取り締まり」や「警察」も無い暮らしが「自由の国」イギリスでの生活に他ならないと嘆く一場面に象徴されるように，フランス人だけでなくイギリス人の愚行や過熱ぶりも風刺の対象とされることで，作者マーフィーのバランス感覚が浮き彫りにされる（Murphy, *Englishman* 15-16；Spence 65）。

マーフィーの『パリよりの英国人』は，一見盲目的愛国主義による反仏で英国鼻根の物語の様相を呈しながら，前述したような形でイギリス人の蛮行や不寛容も暴露する（Murphy, *Englishman* iii）。そして結末において，「フランス風の英国人」ほど「馬鹿馬鹿しいもの」は無いと改心し「決して再び母国を嫌悪することのない」分別を身に着けることを誓う，主人公の言動を媒介に，良識への随順を謳い，国民性の過度な表出の回避を説くが，マーフィーが演出するこうした「古典主義風の端正な節度（Augustan decorum）」は，彼の批評態度においても顕現される（Murphy, *Englishman* 34, 31；Spence 66, 68）。

マーフィーは「ヴォルテール氏宛て」においてヴォルテールの『中国の孤児』との差異を強調するものの，すでに論じたようにマーフィーのヴォルテール版依拠の痕跡が芝居の要所においてみられ，それは前述の『クリティカル・レビュー』でも指摘された通りである。またこの『レビュー』は，創作上の恩義を顧みずにマーフィーが「ヴォルテール氏宛て」を著わしたことをヴォルテールへの意趣返しと捉えているが，こうした指摘は，シェークスピアの「美点」を援用しながら彼の「欠点」を罵倒するヴォルテールが，想像的刺激を受けたシェークスピアの恩に報いず，この「英国の詩人」を「酔っ払いの野蛮人」と揶揄したことについて言及したものである（*Critical*

*Review 440* ; *Gray's-Inn Journal 355* ; *Murphy, Orphan 94*)。しかし忘恩のヴォルテールに対する応酬の一方で、序論で触れたヴォルテールの酷評への反論において対照的なマーフィーの姿が垣間見られる。マーフィーは、批評の際に求められる寛容な態度について提言するような格好で、「偏見の無い批評家」ならば「人間的なたわいなさ」を寛恕し「温厚で人のいい判事」のように判決を下すであろうと主張する (*Gray's-Inn Journal 354*)。また同じシェークスピア擁護論の締めくくりで、「些細な手落ち」を自認することの高潔さを説くヴォルテールの言葉も引用するが、この言葉は、「大変な拍手喝采」で成功裡に幕を閉じ著名人による評価も概ね良好であった自作の『中国の孤児』が孕む種々の欠点を「英国で最低の詩人の一人」として謙虚に自覚するマーフィーの姿を連想させることにもなる (*Gray's-Inn Journal 358* ; *Murphy, Orphan 94-95*)。そしてこうした寛容さと謙虚さに象徴される「古典主義風の端正な節度」は、「フランスの戯曲の密猟者」と評されるマーフィーのフランスものへの受容態度にも反映され、またそれは当時の両義的な対仏感情を背景とするものでもあった (*Spence 68* ; *Dunbar 149*)。

フランスの物品やファッションの影響はある種の風刺の常套的な題材となっていたが、風刺の対象となることは英国社会における影響力の一種のパロメーターでもあり、このことは『パリよりの英国人』で如実に物語られるところであろう (*Eagles 18*)。また流行だけに限らず前節でみたようにイギリス演劇界においてもフランス戯曲の影響は大で、マーフィーがフランスの芝居の盗作者と揶揄される背景ともなっていた。いずれにせよフランスへの蔑視は、イギリスの哲学、文化、あるいは政治におけるフランスの寄与を完全否定するものではなく、それどころかフランスの存在は、イギリスの世論形成や英国国民性の確立において何らかの影響を与えるものでもあった (*Eagles 6, 176*)。フランスはイギリスが自己を定義するためのある種の「基準」、極論すれば、英国がその「アンチテーゼ」となるための「重要な存在」となっていた (*Eagles 12-13, 10*)。しかしこの「基準」や「重要な存在」は否定的意味合いでのみ機能していたのではなく、英国が手本とすべき

憧憬の対象ともなっていた。例えば前述のブラウンは、英国は「虚飾で享乐的で利己的な柔弱」という流儀のもとで利己主義や利害関係により「国民の団結」が損なわれているのを嘆く一方、英国の流儀の範とされるフランスは、柔弱な流儀が優勢であるにも関わらず、「国防」と「団結」という国の基盤が適度な活力を維持していると主張し、その数ある理由の一つとして若者に対する愛国教育などを挙げている (29, 103-104, 135, 136-37)。こうした嫌悪と憧憬の対象として二重性を孕むフランスとの関係を視野に入れるなら、マーフィーが『中国の孤児』においてヴォルテールの先行するテキストをどのような姿勢で受容しようとしたか、その意味合いが明らかとなる。

## 結 論

たしかにフランスとの戦時下「最も有名なフランス人」と一戦を交える「英国臣民」が著わした、ある種の宣伝装置と解される「ヴォルテール氏宛て」の存在は看過できない (Dunbar 72)。しかし本稿で論じたような形でヴォルテール版を、「古典主義風の端正な節度」で取捨選択し、自作に反映させるマーフィーの姿勢は、自らの「些細な手落ち」を潔く認めるヴォルテールのような「分別のあるフランス人」を模倣することを誓う、『パリよりの英国人』の主人公の姿とも通底するものであろう (Spence 68; *Gray's Inn Journal* 358; Murphy, *Englishman* 34, 32)。ヴォルテール批判の「露骨な文化的宣伝」とも極論されるマーフィーの『中国の孤児』を再考する必要性がここにある (Thorpe 38)。

### 引用文献

- Appleton, William Worthen. *A Cycle of Cathy: The Chinese Vogue in England in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. New York: Columbia UP, 1951.
- Ballaster, Ros. *Fabulous Orient: Fictions of the East in England 1662-1785*. Oxford: Oxford UP, 2005.
- Brown, John. *An Estimate of the Manners and Principles of the Times*. 4th ed. London, 1757.

- Bruyn, Frans De. "Shakespeare, Voltaire, and the Seven Years' War: Literary Criticism as Cultural Battlefield." *The Culture of the Seven Years' War*. Ed. Frans De Bruyn and Shaun Regan. Toronto: U of Toronto P, 2014.
- Chang, Dongshin. *Representing China on the Historical London Stage: From Orientalism to Intercultural Performance*. New York: Routledge, 2015.
- Dunbar, Howard H. *The Dramatic Career of Arthur Murphy*. 1946. New York: MLA, 1966.
- Eagles, Robin. *Francophilia in English Society, 1748-1815*. London: Macmillan, 2000.
- Emery, John Pike. *Arthur Murphy: An Eminent English Dramatist of the Eighteenth Century*. 1946. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2016.
- Liu, Wu-Chi. "The Original Orphan of China." *Comparative Literature* 5, no.3 (1953): 193-212.
- McGirr, Elaine. "New Lines: Mary Ann Yates, *The Orphan of China*, and the New She-tragedy." *ABO: Interactive Journal for Women in the Arts, 1640-1830*. 8. 2. 1 (2018): 1-16.
- Murphy, Arthur. *The Englishman from Paris*. 1756. Los Angeles: U of California, 1969.
- ... . *The Orphan of China. A Tragedy*. 3rd ed. London, 1772.
- ... . "To M. De Voltaire." Murphy, *The Orphan of China*. 88-95.
- Ou, Hsin-yun. "Gender, Consumption, and Ideological Ambiguity in David Garrick's Production of *The Orphan of China* (1759)." *Theater Journal* 60, no.3 (2008): 383-407.
- Sekora, John. *Luxury: The Concept in Western Thought, Eden to Smollett*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1977.
- Spector, Robert D. *Arthur Murphy*. Boston: Twayne, 1979.
- The Critical Review. The Critical Review: or, Annals of Literature*. Vol 7. London, 1759.
- The Gray's-Inn Journal. The Works of Arthur Murphy*. Vol.5. London, 1786.
- Thorpe, Ashley. *Performing China on the London Stage: Chinese Opera and Global Power, 1759-2008*. London: Macmillan, 2016.
- Trefman, Simon. Introduction. Murphy, *The Englishman from Paris*. i-vii.
- Voltaire. *The Orphan of China. A Tragedy. Translated from the French of M. de Voltaire*. London, 1756.
- Yang, Chi-ming. *Performing China: Virtues, Commerce, and Orientalism in Eighteenth-Century England, 1660-1760*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2011.